



「名探偵カッレくん」

「名探偵カッレくん」が発表された

のは1946年。「長くつ下のピッピ」が出版社の一般公募で金賞を獲得した翌年、リンドグレンはこの探偵小説で再度の受賞を果たしました。そして以降彼女は懸賞に応募する必要はなくなります。「やかまし村の子どもたち」の出版も決まり、翌年の1947年には「名探偵カッレくん」の映画化が決定。それを皮切りに30本のスウェーデン映画とテレビドラマ用のシリーズが撮影されることとなるのです。

のんびりと平和で、いささかたいくつなスウェーデンの田舎町。大きな事件など起きようもないような静かな町で、日々繰り返される「バラ戦争」。主人公のカッレと親友のアンデス、男の子顔負けのおてんば娘のエーヴァ・ロットの3人が「白バラ軍」、対する「赤バラ軍」は、遊び仲間のシックスデ

ン、ベンカ、ユンテの3人。小さな石で

できた「聖像」を巡り、彼らは夜となく昼となく、裸足で町中を駆け回ります。そしてある夏の日、起きるはずのない本当の事件が起こり、彼らも巻き込まれていくことになります。

「名探偵カッレくん」は続編の「カッレくんの冒険」「名探偵カッレとスパイ団」とともに、リンドグレンがスウェーデンのティーン・エイジャーを描いた作品です。ちよつぱり恋愛の香りもしながら、何よりも子どもたちの力で「悪」に立ち向かうというストーリーは、大人が読んでも読みごたえ充分。独特の魅力が溢れるシリーズです。

日本の国民的映画である「男はつらいよ」の山田洋次監督は、「名探偵カッレくん」の文庫版の巻末に「あれのりンドグレン」という題で文章を寄せています。大学卒業後、映画人となり、様々な悩みを抱えてい

た頃にこの作品と出合ったこと、読みながら次々と映画の場面が浮かんできて、本を置く間も惜しいようだったこと。そして後年「東さんシリーズ」を作る際に、舞台設定のヒントになったのが「カッレくん」だったのだと、驚くようなエピソードも書かれています。

事件を取り巻く人々の心理描写はもちろん、町全体の情景や美しい自然の描写も、リンドグレンの筆ならではの。行ったこともないスウェーデンの田舎町が自分の町であるかのようになり、自分も一緒に「バラ戦争」をしているかのように…生き生きと胸に迫ってくる文章が、山田洋次監督を夢中にさせたことは、容易にうなずける話です。

「この夏、お子さんと一緒に」「名探偵カッレくん」を読んでみませんか。あなたも「白バラ軍」になって、スウェーデンの小さな町の石畳を、裸足で駆け歩いていく…そんな気分になつとれます。

※アストリッド・リンドグレン作
尾崎 義昭
『名探偵カッレくん』（岩波書店刊）

監修 齋藤惇夫

作家・児童文学者。福音館書店の専務取締役（編集責任者）として子どもの本の編集に携わり、2000年に退社、創作活動に専念。著書に『グリックの冒険』（岩波書店・日本児童文学者協会新人賞受賞）、『冒険者たち』（岩波書店・国際アンデルセン賞優良作品賞受賞）、『ガンバとカワウソの冒険』（岩波書店・野間児童文芸賞、国際アンデルセン賞優良作品賞受賞）、『哲夫の春休み』（岩波書店）などがある。



ASTRID LINDGREN

アストリッド・リンドグレン

1907-2002

スウェーデンのスモーランド地方、ヴィンメルビーに生まれ、小さな農場で4人兄弟の長女として子ども時代を過ごす。『長くつ下のピッピ』『やかまし村の子どもたち』『名探偵カッレくん』など、世界中で愛されている物語は130作品以上。2002年には、児童青少年文学賞である「アストリッド・リンドグレン記念文学賞」が創設された。

PRESENT

リンドグレンの本をプレゼントします。詳しくはP.26をご覧ください。